

身体の詩学

——シモーヌ・ヴェイユとD・H・ローレンス——

今 村 純 子

はじめに

【默示録論⁽¹⁾】はD・H・ローレンス⁽²⁾の遺作である。ローレンスは、触発の余地がなく、道徳が並べ立てられたような聖書、わけても「ヨハネの默示録」に幼少期から激しい嫌惡を抱いていたといふ。自らの死期を悟った人間が、残された時間と体力のなかで、もっとも嫌惡する聖書のテキストについて書き記す。その意味するところは、いつたい何であろうか。それは、キリストの一二人の弟子のうちに裏切り者ユダが入り込まねばならなかつたように、「ヨハネの默示録」こそは、通常あえて見ようとしている、まぎれもなくわたしたちの心性の一部だということである。その核には、わたしたちの心をどこまで蹂躪し、どこまでも呪縛する「力の支配」とシモーヌ・ヴェイユが述べるものがある。「力の支配を認識しなければ、力の支配を重ん

じなければ、愛することも、正義であることもできない」(『イーリアス』、あるいは力の詩篇⁽³⁾)。『イーリアス』は、どこにも救いが見られない殺戮の物語である。だがそれと同時に、どうしようもなく歌いたいと、どうしようもなく他者に伝授したいと思われる詩でもある。この事実は、悪の根源まで降りていかなければ、わたしたちは、美にも、芸術にも、ひいては人生そのものにも触れられないということを意味する。さらにヴェイユは、「それにしても奇妙な世紀である。叙事詩の時代とは対照的に、戦争や政治における力の効果は、つねに栄光に包まれて、いなければならず、それに代わって、愛においてのみ人間の悲惨さが見られる」というのは(『『イーリアス』、あるいは力の詩篇⁽⁴⁾』)と書き記している。だが、『默示録論』の二年前に発表されたローレンス最後の長編『チャタレイ夫人の恋人⁽⁵⁾』は、まさしく、戦争による傷がどれほどまでにわたしたちの心を蹂躪

し、侵食するのか、そして愛における悲惨さを踏まえつつ、この愛における悲惨さが、いつたいどのようにして美による至高の歎びへと転換しうるのかを描き出した一書ではなかつたであろうか。『チャタレイ夫人の恋人』は、禁忌とされている性愛を核に据えた、一大センセーションを巻き起こした作品でもある。だが世界中の人々の心を搔き立てるこことによって、逆説的にローレンスは、わたしたちの心の奥底に潜む「ユダ」をあまり出し、その「ユダ」が本書の登場人物それぞれと合わせ鏡となることで、現代において、けつして偶像崇拜に陥ることなく、キリスト教ではなく、キリストに倣つて生きるとはいかなることかを描き出そうとしたのではないであろうか。

一人とモノ

戦争で心身の深い痛手を被つた人間がさらに深刻な身体障碍を負い、それゆえいつそ心が頑なになり、心ある人は離れ、その人の属性にだけ興味を抱く人しかまわりにいなくなるという人物を、ローレンスは、残酷なまでに徹底的に、チャタレイ夫人の夫クリフォードに造型してゆく。他方でヴェイユは、悪の根源についてこう述べている。「物が人間の役割を果たし、人間が物の役割を果たす。これが悪の根源である」(『工場生活の経験⁽⁶⁾』)、と。さらに力に触れた者の物化をこう記している。「力は、それを被る者も、それを操る者も、違う仕方ではあるが、ひとしくその魂を石にする」(『『イーリアス』、あるいは力

の詩篇⁽⁷⁾』)、と。クリフォードは貴族であるのと同時に、労働者をモノとしてしか見ない炭坑主であり、それゆえクリフォード自身がモノとなつてしまつてゐる。さらに、戦争のトラウマを象徴する深刻な身体障礙を負つてゐるため、なおいつそう精神面での成功を証する社会的名声の獲得に躍起になつてゐる。そうしたクリフォードのまわりに集まる人々のおしゃべりはコニーコとチャタレイ夫人にとって「騒音」でしかない。いつさの生きているリアリティが感じられなくなつたコニーは、ついに深刻な心身衰弱に陥つてしまふ。このコニーを取り巻くわめて個人的な状況は、実のところ、近代化する過程の世界の変化と類比関係を保つてゐる。このミクロコスモスとマクロコスモスとの均衡を、ローレンスは繊細に克明に描き出してゆく。

これが歴史なのだ。一つのイングランドがそれまでのイングランドを塗りつぶしてしまふのだ。炭坑はこれらの人々の邸宅を豊かにした。炭坑がそれまでのイングランドの田舎家を塗りつぶしてしまつたように、いま彼らはこの邸宅を塗りつぶしていく。工業国イングランドが農業国イングランドを塗りつぶす。一つの意味が別な意味を消してしまう。新しいイングランドが古いイングランドを塗りつぶすのだ。新旧の連続性は有機的でなく、機械的なのだ。この「力の支配」から逃れられる者はいない。『イーリアス』の登場人物の誰ひとり逃れられないのと同様に。なぜならわたしたちは、社会という集團から逃れて、森の動物や鳥たちによ

うに生きることはできないからである。それにもかかわらず、ローレンスは自らの作品で、究極の触覚を通した他者との出会いを核に据えることで、力の支配を逃れうるか細い可能性を見ようとしているのではないか。とはいえ、恋愛は金銭や名声と同様にわたしたちの集団への帰属意識を強化する役割をも果たしうる。「文明社会というものは狂つていた。金銭と、いわゆる愛とが、社会の二大狂氣であった」⁽¹⁴⁾。それゆえ端的には、わたしたちの日常を彩る「往復運動」から星辰の運動に倣う弱に陥ったコニーに代わってクリリフォードの介護を一手に引き受けけるボルトン夫人は、「三年前に炭坑の事故で夫を亡くしている。ボルトン夫人は、「この上流社会の人間、爵位のある紳士で、本や詩を書く文学者で、グラフ雑誌に写真の出るような人間と接触することに、興奮を味わっていたのである」⁽¹⁵⁾。そして、村の噂話を好んでクリリフォードに語つて聞かせている。だが本来は、「あらゆる人間が心から同情するような、苦惱に満ちた、打ちひしがれたものにたいする尊敬の念と、細かな心づかいをもつていてはじめて、ほかの人間のもつとも私的な事情を聞くのが許されるのである」⁽¹⁶⁾。それゆえ「力」の上澄みに歓喜するこの女性は、コニーに吐氣を催させる醜悪な存在でしかない。だが、コニーの恋人は誰なのだろうと思はかり、連鎖的に亡くなつた夫のことを考えるボルトン夫人は、「このクリフォードと彼が代表しているものすべてにたいして、大きな怨

うに生きることはできないからである。それにもかかわらず、ローレンスは自らの作品で、究極の触覚を通した他者との出会いを核に据えることで、力の支配を逃れうるか細い可能性を見ようとしているのではないか。とはいえ、恋愛は金銭や名声と同様にわたしたちの集団への帰属意識を強化する役割をも果たしうる。「文明社会というものは狂つていた。金銭と、い

され、滅びるほかないのである。⁽²⁰⁾

二 真空と沈黙

コニーの恋人メラーズが、森を保護する森番であることは重要である。ふたりが出会うのは森のなかのいっそうの空白である空地である。さらに両者のあいだに言葉はなく、ただコニーが雛鳥を見つめつつ流す一筋の涙のうちにコニーの優しさを見て取り、メラーズはコニーに敬愛の念を抱く。「優しい、そうだ彼女には、どこか優しい、育つてゆくヒヤシンスのそれに似た優しさ、今日のセルロイド製の女性には失われている優しいところがあつた」。あるときは、故障したクリリフォードの電動車椅子が情け容赦なくブルーベルの花同様に、顔面蒼白で、息も絶え踏みにじられるブルーベルの花同様に、あたかも絶えのメラーズをクリリフォードはモノとしてこき使う。あるいはまた、雨のなかを突然コニーは裸で森のなかを飛び出してゆき、メラーズは自分も裸になつてコニーを追いかける。これらは、けつして草木になれない、そして近代化とは無縁ではいるない人間の戯画でもある。だが、「花はどんな天気でも外にいる」。この草木の必然性への同意の姿に倣おうとするその方向性を垣間見させる。その必然性への同意の方向性は、結局のところ、室内における性愛を通した、アダムとイヴが恥の感情を抱く以前に回帰することに収斂される。それはまた、精神的のみならず、道徳的にも孤独であることに同意することでも

みの念をコニーと共有していることを感じた⁽¹⁷⁾のである。そして、亡き夫が傍に居るというその触覚の記憶が、激刺とした恋愛の直中にあるコニーの姿を視覚的に捉えることで呼び覚まされ、互いに相容れないはずのコニーとつながる一点が憐れみの感情を通して溢れ出るのである。愛はこのように、連鎖的な広がりを有している。

滑車が往復運動を円環運動に変えてゆくように、労働は本来、この世の往復運動を星辰の運行に倣う円環運動に変えてゆくはずである。だがヴェイユがテーラー式労働現場で経験したのと同様、ローレンスが描く炭坑労働者たちは、「人間と屍の中間状態」（『イーリアス』、あるいは力の詩篇）である。ところがこの状態は、実のところ、支配階級の人間とて同様である。それは、世間を離れ、森で孤独に暮らすメラーズの次の独立に収斂される。

女が悪いのでもなく、恋愛が悪いのでもなく、セックスが悪いのでもなかつた。悪いのは、あの向こうの方にある、邪惡な電灯や惡魔的な機械の騒音だった。機械的な貪欲なメカニズムと、機械化された貪欲な世界の中に、光を輝かし、灼熱した鉄を吐き出し、車輛の騒音を立てる巨大な邪惡物が横たわっていて、自己に合致しないものすべてを滅ぼそうと待ちかまえていたのだ。それはまもなく森を滅ぼしてしまうだろう。そしてもはやヒヤシンスも咲かなくなってしまうであろう。傷つきやすいものはすべて、鉄塊の下に蹂躪される。

彼女は今、ありのままの自分という真の岩盤に達し、恥ずかしさという感情と無縁になつていることを感じた。彼女の自我はいま肉欲的な自我であり、裸となり、恥も感じなかつた。彼女は勝利を感じた。自慢したいような勝利を感じた。そうだ！ これがそうだつたのだ！ これが生命だつたのだ！ これが本当の自分自身のあり方だつた！ 何もかくしたり恥ずかしがつたりすることはなかつたのだ。彼女は一人の男とともに、一個の他者とともに、究極の自分の姿を理解した。

労働者をモノとして見るおぞましさはまた、上流階級の人間をその属性で見るおぞましさと類比関係を保つていて。チャタレイ夫人としてコニーに敬意を払う人はいても、ひとりの生身の肉体をもつた女性としてコニーに敬意を払う人はひとりもないなかつた。それぞれに個性があり、それぞれに人格があり、また男女は決定的に異なる生物学的構造を有しており、また、それぞれの人間は生殖も排泄もする。それらが「ないこと」にされる「既成品」を見る眼差し、仕草、身振り、言葉などおぞましく、人間を疎外するものはない。

ところでヴェイユも、『イーリアス』を優しさという観点から捉え直している。「ここから、『イーリアス』がただひとつのみあることがわかる。それは、優しさからやつてきて、そして太陽の明るさのように、ひとしくあらゆる人間に広がつて

ゆく苦渋によるものである。語調が苦渋にまみれてしまうことはけつしてなく、そしてまた嘆きに陥ってしまうこともけつしてない。どこまでも不正義である暴力に満ちた『イーリアス』の描写において、愛と正義はどこにもその居場所をもたないが、『イーリアス』は愛と正義の光で満たされている」と。この優しさとは、精神的にのみならず、道徳的にも孤独を余儀なくされた人間が、それでもけつして不正義に染まることがない「弱さの強さ」である愛が宿るただひとつの場所でもある。

三 個人と社会

森番であるメラーズは、別居中の妻の誹謗中傷によつて異常な性的欲求の持ち主だと村中の評判を立てられ、支配階級にある雇い主の妻コニーとの不義密通を噂される。このメラーズをローレンスは、「正義の人」として、「聖なる人」として描き出す。ヴェイユはもつともおぞましい光景として次のような比喩を用いている。「輕罪裁判所で流暢に気のきいた冗談を交えて話す裁判官の前で、ひとりの不幸な人がもごもごと口ごもる光景ほどおぞましいものはない」（人格と聖なるもの）⁽²⁶⁾、と。メラーズが置かれた状況とは、この光景における被告人の立場である。クリフォードの心象を代弁する村の人々は裁判官の立場にある。裁判官は流暢に、既成品の言葉を並べ立てる。他方で、被告人は何も話せず口ごもるばかりである。犯罪者のレッテルを貼られることほど社会すなわち集団から見捨てられることは

と関係をもつたことを唾棄したい気持ちにかられる。それらはまぎれもなく、「セルロイド製の」、「既成品の」コニーの一部分である。あるいはまた、コニーの父も姉も、メラーズの知性と品性は認めながらも、メラーズが属する階級が自分たちに醜聞をもたらすことに耐えられない。この社会的上下関係における侮蔑の連鎖は留まるところを知らない。

聖フランチエスコも、十字架の聖ヨハネも、権力を有している。かれらは唾棄すべき存在として、一二人の弟子から見捨てられたりはしない。裸であること、貧しさのなかにあることが徳であるならば、そもそも裸で、そもそも貧しい者はいつたいどうすればいいのか、と『默示録論』は問いかける。⁽²⁷⁾さらに、労働者の目的が金銭であるならば、労働者は存在しなくなるという矛盾をヴェイユは端的にこう指摘する。「小工場主や小商人が富めば、大工場主や大商人になる。教授や小説家や大臣は、富んでいても貧しくても、教授であり、小説家であり、大臣である。だが、労働者が大いに富むと、労働者ではなくなる」（奴隸的でない労働の第一条件）⁽²⁸⁾、と。

現実のなかではわたしたちは集団性から逃れて、すなわち、金銭や名声から離れて生きることはできない。だが、イメージのなかでは確かに生きられ、感じられる。コニーとメラーズがひとたび離れ離れになり、その眼差し、仕草、身振り、言葉、音が、記憶のなかで活き活きしたイメージとして息づくとき、メラーズは、神々しい優しさに包まれる。メラーズの村での悪

い。そしてまさしく社会という集団に自らの師を売り渡すユダの裏切りを端緒に、世間の人々はもちろんのこと、一二人の弟子すべてに見捨てられ、精神的にのみならず、道徳的に孤独である最たる状態が、キリストの受難である。神性と極刑の表象は表裏一体である。というのも、そこではいつさいの集団性が剝奪されているからである。神は不在である。あるいは、無限の距離に隔てられたところにいる。そして逆説的にも、そこにこそ至高の調和がある。ヴェイユはこう述べる。「キリストの叫びと〈父〉の沈黙とが交響し、至高の調和を奏でる。あらゆる音楽はその模倣にほかならず、わたしたちのうちで最高度に悲痛で甘美な調和による音楽であつても、この至高の調和にははるかに及ばない」（ピタゴラス派の学説について）⁽²⁹⁾。とはいっても、聖書における受難のシーンはすでに固定されたイメージしか喚起しえず、たえずわたしたちを内側から触発する働きを有していない。そもそもわたしたちは聖人か俗人かの二者択一の属性を生きてはいない。わたしたちは聖なる部分も俗なる部分も併せもついている。いついかなるときにもけつして力の支配から自由ではない。「チャタレイ夫人の恋人」の掉尾に差し掛かつても、コニーはその階級から醸し出されるもので絶えずメラーズを深く傷つけている。たとえば、メラーズを侮辱することになる、あきらかに不合理なクリフォードへの弁明を、メラーズと一緒になるという目的達成のために平然とおこなう。あるいはまた、メラーズの妻の野卑を知つてメラーズの叫びと〈父〉の沈黙とが交響し、至高の調和を奏でる。あらゆる音楽はその模倣にほかならず、わたしたちのうちで最高度に悲痛で甘美な調和による音楽であつても、この至高の調和にははるかに及ばない」（ピタゴラス派の学説について）⁽²⁹⁾。

評が伝えられたのがクリフォードやボルトン夫人の手紙を通じてであるならば、メラーズの神々しい優しさがコニーに運ばれるのもまた、手紙という「物質」を通してである。そこには、吐息も、眼差しも、仕草も、身振りもなく、あるのはただ、それらの知覚の活き活きしたイメージだけである。

過去のどんな悪い時代も、クロッカスを死滅させませんでした。女性の愛を滅ぼすこともできませんでした。だからどんな時代が来ようとも、あなたを求める僕の気持ちを消すことはできず、あなたと僕のあいだにある小さな焰を消し去ることもできないでしょう。来年はいつしょになれるのです。僕は恐怖を感じていますが、僕とともに在るあなたを信じています。最善なるものを求めて力を尽くします。僕は、人間を超えたなにかを信じるほかありません。自己の最善のものをほんとうに信じ、あとはそれを超えた力を信じる以外、未来に確信を抱く道はありません。だから僕は、あなたと僕とのあいだにある小さな焰を信じるのであります。僕にとっては今のところ、それが世界じゅうでただ一つのものなのですから。

種子は地中深く眠り、春が訪れるまで目覚めない。だが、コニーとメラーズに春が訪れる可能性はきわめて薄い。しかしこだひとつ確かなことは、かれらの優しさは、けつしていかなる不正義も被らないということである。それはまた炭坑の事故で亡くなつた夫への愛の確かさゆえに、クリフォードに寛大であ

る」ことである。ボルトン夫人の優しさにも連なるものである。ところでも、そもそも生者と死者とは、無限の距離に隔てられるからである。ヴァイユはわたしたちのうちなる相矛盾するふたつの欲望について、こう述べている。「恋人や友人はふたつの欲望を抱いている。そのひとつは、一方が他方のうちに入り込み、ひとつになるほどまでに愛し合うことである。もうひとりは、ふたりが地球の反対側にまで隔てられていても、ふたりの結びつきが少しも弱まらないほどまでに愛し合うことである。この世で人間が空しく欲するものはすべて、神においては完全であり、実在のものである。不可能なこれらの欲望はどうかくも、わたしたちの使命の徴のようにわたしたちのうちにある。そしてこれらの欲望がわたしたちにとって善きものとなるのは、やはこれらを果たすと希望なくなるときである」（「神への愛と不幸」）⁽³⁾。

結びに代えて

シヤーヌ・ヴァイユは、労働者に必要なものは美であり、詩であり、その源泉は、神であり、宗教である、と述べている。⁽⁴⁾ だがそれが具体的に何であるのかは詳らかにしていない。しかし、工場内の機械や素材の「映し出す」という働きに着目し、そこに宇宙の象徴を読み取る注意力の可能性について言及している。他方で、画家でもあるローレンスは、霧雨が灰色に映る

「」⁽⁵⁾と夜の漆黒が知られるように、知覚、わけても視覚の働きに着目している。ローレンスにおける知覚の描写は、視覚と聴覚の輪舞としてあらわれ、触覚は、見つめられる眼差しや、戸が閉まる音といった、視覚と聴覚における余韻に極まっていく。こうして、触覚が一瞬の現象に留まらず、永遠に奏でられるイメージとして花咲くのである。

愛し合うふたりの欲びが完全に共振する」と得られる無の境地という「第二の誕生」、さらに、生者と死者をも包括する、かぎりなく隔てられた距離において奏でられる調和、」のふたつの可能性をローレンスは、センセーショナルな性愛のプロットを意識的に設定する」とによつて描か出そうとしたのである。

(1) *Apocalypse*. 一九二九年に執筆。一九三〇年に出版。

(2) David Herbert Richards Lawrence, 1885-1930. イギリスの小説家、詩人。

(3) ローレンスは書物についてこう述べる。「ついで、書物はうわに究めいやせぬものを蔵してらる間は、かならず生き続けるものやある。ひとたび測りつくやれぬや、ただちに生命を失う」D.H. Lawrence, *Apocalypse*, London, Penguin Classics, 1996 (1931), p.60.

(4) 「諱念と冥想と自己認識の宗教はただ個人のためのものである。しかしながら、人は己れの本性のほんの一部においてのみ個人たりうる。他の大きな領域においては、人は集團である」ibid, p.67. 前掲、四八頁。

p.295. シヤーヌ・ヴァイユ「工場生活の経験」、前掲『シヤーヌ・ヴァイユトノロジー』八六頁。

(12) Simone Weil, *L'Iliade ou le poème de la force*, *Oeuvres complètes de Simone Weil, Tome II, volume 3, Écrits historiques et politiques*.

Vers la guerre (1937-1940), Paris, Gallimard, 1989, p.251. シヤーヌ・ヴァイユ、今村純子訳「マイコアス」、あむじは力の詩篇』『シヤーヌ・ヴァイユ アンソロジー』河出文庫、110一八八年、一九二二—一九四〇年。

(7) *Ibid.*, p.253. 前掲、一九七一—一九八〇頁。

(8) *Lady Chatterley's Lover*. 一九二六年に執筆を開始、一九二八年に私家版を発表。一九二九年に性的描写を削除して出版。

(9) キリスト者がいねに偶像崇拜に陥る危険性をシモーヌ・ヴァイユは次のように指摘してくる。「殉教者たちは神と離れているとは感じなかつたが、かれらが念頭においたのは別の神であった。それにおそらく殉教者にならなかつたほうがよかつたのである。責め苦や死のなかに見出しかれらの神は、ローマ帝国が公式に採用し、そして皆殺しとぶ手段によって押しつけた神と何ら変わひなし」Simone Weil, *Oeuvres complètes de Simone Weil, Tome VI, volume 1, Cahiers I (1933-septembre 1941)*, Paris, Gallimard, 1994, p.298. 山崎庸一郎・原田佳彦訳『カイロ』、あむじは力の詩篇』『シヤーヌ・ヴァイユの博士論文を提出したミクロス・ヴァーネーは、その掉尾でこう述べてある。「実存主義、弁証法神学、聖書学復興の時代にありて、シヤーヌ・ヴァイユの思弁的神秘主義は、キリスト教的アントニヌスの偉大さを、それが現代に欠如してゐる」と、ただひとり孤高に証言してくる】

(10) 小説家のアイラス・マームラードはシヤーヌ・ヴァイユの博士論文を提出したミクロス・ヴァーネーは、その掉尾でこう述べてある。「実存主義、弁証法神学、聖書学復興の時代にありて、シヤーヌ・ヴァイユの思弁的神秘主義は、キリスト教的アントニヌスの偉大さを、それが現代に欠如してゐる」と、ただひとり孤高に証言してくる】Miklos Veto, *La métaphysique religieuse de Simone Weil*, Paris, Vrin, 1971, p.149. クロス・マームラード、今村純子訳『シヤーヌ・ヴァイユの新序』慶應義塾大学出版会、1100一六八年、三四二頁。

(11) Simone Weil, *Expérience ouvrière et l'adieu à la révolution*, Paris, Gallimard, 1989, *L'Expérience ouvrière et l'adieu à la révolution*, Paris, Gallimard, 1989,

(19) Simone Weil, *L'Iliade ou le poème de la force*, *Oeuvres complètes de Simone Weil, Tome II, volume 3, ibid*, p.231. シヤーヌ・ヴァイユ『マイコアス』、あむじは力の詩篇』、前掲、一一八頁。

(20) D.H. Lawrence, *Lady Chatterley's Lover*, *Ibid.*, p.119. ローレンス、前掲『シヤーヌ・ヴァイユ夫婦の恋』、一一五頁。

(21) *Ibid.*, p.119. 前掲、一二五—一二六頁。

(22) *Ibid.*, p.223. 前掲、四一—一頁。

(23) 「孤独のなかでのみ働きうる、稀有名質の注意力によってのみ、非人格的なものの移行が果たされる。実際に孤独であるだけではなく、道徳的に孤独である」ということが不可欠である。この移行は、自分をある集団の成員として、「わたしたちは」の一部分とみなして

「人のはねらはたへント果たわれな」 Simone Weil, *«La personne et le sacré»*, *Écrits de Londres et Dernières Lettres*, Paris, Gallimard, 1957, p.17. ハサーウィ・エマード「人格と聖なるもの」、前掲、*『チャーチル夫人の戀人』* 1111頁。

- (24) D.H. Lawrence, *Lady Chatterley's Lover*, *ibid.*, p.247. ロンハーバー、前掲、「チャーチル夫人の戀人」、前掲、『チャーチル夫人の戀人』 1111頁。
- (25) Simone Weil, *«L'Iliade ou le poème de la force»*, *Oeuvres complètes de Simone Weil, Tome II, volume 3*, *ibid.*, p.248. ハサーウィ・エマード、前掲、『シモン・ワイル、トム II、ボリューム 3』、前掲、「アダムの力の詩篇」、前掲、「チャーチル夫人の戀人」 1111頁。

- (26) Simone Weil, *«La personne et le sacré»*, *Écrits de Londres et Dernières Lettres*, *ibid.*, p.14. ハサーウィ・エマード「人格と聖なるもの」、前掲、「チャーチル夫人の戀人」 1111頁。
- (27) Simone Weil, *«A propos de la doctrine pythagoricienne»*, *Intuitions pré-chrétiennes, Oeuvres complètes de Simone Weil, Tome IV, volume 2, Écrits de Marseille, Grèce-Inde-Océanie (1941-1942)*, Paris, Gallimard, 2009, p.291. ハサーウィ・エマード、今村純子訳「ピタゴラス派の教説」、前掲、「前キリスト教的直観」法政大学出版局、11011年、一九五〇頁。

- (28) 「精神上の貴族は自我実現の他者への奉仕のへやに口が義務の遂行を厭ふ。貧じゆるに仕えよむべ。おりしに結婚わゆ。しかば、貧じゆるのは」 体誰に仕えたふむか」 D.H. Lawrence, *Apocalypse, ibid.*, p.28. D. H. ロンハーバー、前掲、「黙示録論」 1111頁。
- (29) Simone Weil, *«Condition première d'un travail non servile»*, *ibid.*, p.421. ハサーウィ・エマード「奴隸的でない労働の第一条件」、前掲、「チャーチル夫人の戀人」 1111頁。

- (30) D.H. Lawrence, *Lady Chatterley's Lover*, *ibid.*, p.300. 前掲、ロンハーバー、「チャーチル夫人の戀人」 1111頁。
- (31) Simone Weil, *«L'amour de Dieu et le Malheur»*, *Oeuvres complètes de Simone Weil, Tome IV, volume 1*, *ibid.*, p.353. ハサーウィ・エマード

「神への愛と不幸」、前掲、「チャーチル・エマード・ハサーウィー」 1111頁。

(32) Simone Weil, *«Condition première d'un travail non servile»*, *Oeuvres complètes de Simone Weil, Tome IV, volume 1*, *ibid.*, p.432. ハサーウィ・エマード「奴隸的でなく労働の第一条件」、前掲、「チャーチル・エマード・ハサーウィー」 1111頁。

(33) *ibid.*, p.423. 前掲、「チャーチル・エマード・ハサーウィー」 1111頁。

(34) 「彼は彼女の前に立つて、細い道を耐風ランプを振りながら進んだ。その光の中に、濡れた草、蛇のような黒く光る木の根、蒼白い花などが浮かび上がった。それらのもの以外は、あたりは一面灰色の霧雨と完全な闇だった」 D.H. Lawrence, *Lady Chatterley's Lover*, *ibid.*, p.127. ロンハーバー、前掲、「チャーチル夫人の戀人」 1111頁。

(35) 「チャーチル・エマード」 哲学・美学、立教大学兼任講師（著書）『チャーチル・エマード』、前掲、「チャーチル夫人の戀人」 1111頁。

- （36）「彼女は彼女の前に立つて、細い道を耐風ランプを振りながら進んだ。その光の中に、濡れた草、蛇のような黒く光る木の根、蒼白い花などが浮かび上がった。それらのもの以外は、あたりは一面灰色の霧雨と完全な闇だった」 D.H. Lawrence, *Lady Chatterley's Lover*, *ibid.*, p.127. ロンハーバー、前掲、「チャーチル夫人の戀人」 1111頁。
- （37）「彼は彼女の前に立つて、細い道を耐風ランプを振りながら進んだ。その光の中に、濡れた草、蛇のような黒く光る木の根、蒼白い花などが浮かび上がった。それらのもの以外は、あたりは一面灰色の霧雨と完全な闇だった」 D.H. Lawrence, *Lady Chatterley's Lover*, *ibid.*, p.127. ロンハーバー、前掲、「チャーチル夫人の戀人」 1111頁。

- （38）「彼は彼女の前に立つて、細い道を耐風ランプを振りながら進んだ。その光の中に、濡れた草、蛇のような黒く光る木の根、蒼白い花などが浮かび上がった。それらのもの以外は、あたりは一面灰色の霧雨と完全な闇だった」 D.H. Lawrence, *Lady Chatterley's Lover*, *ibid.*, p.127. ロンハーバー、前掲、「チャーチル夫人の戀人」 1111頁。

- （39）「彼は彼女の前に立つて、細い道を耐風ランプを振りながら進んだ。その光の中に、濡れた草、蛇のような黒く光る木の根、蒼白い花などが浮かび上がった。それらのもの以外は、あたりは一面灰色の霧雨と完全な闇だった」 D.H. Lawrence, *Lady Chatterley's Lover*, *ibid.*, p.127. ロンハーバー、前掲、「チャーチル夫人の戀人」 1111頁。
- （40）「彼は彼女の前に立つて、細い道を耐風ランプを振りながら進んだ。その光の中に、濡れた草、蛇のような黒く光る木の根、蒼白い花などが浮かび上がった。それらのもの以外は、あたりは一面灰色の霧雨と完全な闇だった」 D.H. Lawrence, *Lady Chatterley's Lover*, *ibid.*, p.127. ロンハーバー、前掲、「チャーチル夫人の戀人」 1111頁。

〈特集1 身体論——現代における瞑想・祈り・労働の意義を求めて〉

初期瑜伽行派の身体論と全人格的思惟論

はじめに
はじめに
いわゆる冥想（瞑想）の意義を探求して来た玉城学説の軌跡を辿りたい。

合田秀行

いわゆる冥想（瞑想）の意義を探求して來た玉城学説の軌跡を辿りたい。

1 初期瑜伽行派に見られる身体論

イングリッシュに興起した大乗仏教の潮流は、中觀思想と双璧をなす唯識思想の形成へと発展していく。論題では取えてこの「瑜伽行派」(yogācāra) という名称を用いた。仏教とは異なる理論の集積ではなく、解脱という宗教的な境位に至るために理論と実践との両面を有しており、修行という侧面も極めて重要な位置を占めている。修行を論じるに際しては、「身体論」の問題が不可避であることは明白であり、瑜伽行派とした。

本稿前半部の主眼は、瑜伽行派でも初期から中期に掛けての論書に着目して、身体に関わる素朴な観点を確認してから、瑜伽行派における修行論や心識説の文脈における身体論を繰り上げてある。その検討を踏まえて、後半部では、玉城康四郎が提唱した全人格的思惟の特徴を確認し、さらに比較思想の視点から

①瑜伽師のあり方は、ブッダ以来の伝統的な修道論の基本路線上に位置づけようとする意図が窺知される。
②膨大な「瑜伽師地論」において、瑜伽師の用例は、ほぼ「声聞地」(Śravakabhūmi) に集中している。